

建築家資料群に含まれる船室デザイン資料

美術工芸資料館 特任専門職（学芸員） 佐藤安乃

美術工芸資料館には、建築家・村野藤吾（1891-1984）の建築設計図面をはじめ、複数の建築家や編集者の資料が収蔵されている。本記事にてこれらの建築関係資料を紹介するのは、7年ぶりとなる。今回はその中から、美術工芸資料館にて先般開催した展览会「海をゆく建築——村野藤吾と本野精吾の船室デザイン」（2025年6月2日～7月12日）に出品した資料を中心に、建築家資料群に含まれる船室デザイン資料について紹介したい。

現在では、建築家と船にはあまり関わりがないよう思われるかもしれない。しかし、船が國力を示す存在として考えられていた1920-30年代の日本では、客船、とりわけ海外と日本を結ぶ豪華客船の船室デザインには、国内の著名な建築家が関わっていた。村野藤吾もそのひとりである。

村野藤吾が携わった代表的な客船として、「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」の二つの姉妹船が挙げられる。これらは、大阪商船（現・商船三井）が就航させた南米航路の客船である。基本設計には、当時の大阪商船で多数の船を手がけてきた工務部長・和辻春樹（1891-1952、哲学者・和辻哲郎の従弟）があたった。残された「あるぜんちな丸」（1939年竣工）の図面から、村野藤吾は一等食堂、一等スモーキングルーム、一等ベランダの室内装飾設計を担当したと思われる。図面の中で最も特徴的なのは、「一等スモーキング 正面出入口扉薄肉彫刻及象嵌模様」（図1）である。「象嵌（ぞうがん）」とは、一つの素材に異質の素材をはめ込む工芸技法を指す。図面内にはケヤキ、チーク、コクタン、トチ、モミヂ、メー

ブルなど、彫刻に使用するさまざまな木材が詳細に記されている。また、ヤシの葉や鳥、水瓶が描かれる図柄は、南米航路にちなみ南国や熱帯樹林を表現しているよううに見える。

「あるぜんちな丸」から約半年遅れのペースで建造された「ぶらじる丸」（1939年竣工）では、村野藤吾は一等スモーキングルーム、一等ローレンヂ（ラウンジ）の設計を担当した。一等ローレンヂの平面図と天井伏図（図2）からは、国内産の大理石が巻かれた4本の丸柱や、梁を利用し植物模様が蒔絵のよう施された間接照明が確認でき、材料や装飾からその豪華さがうかがえる。また、照明の周囲には尾州産のヒノキを使った楕円形木枠が巡らされており、十二星座の象嵌が見られる。日本的でありながら、繊細なモチーフが散りばめられ、「あるぜんちな丸」よりも欧風のデザインに近づいた印象である。

「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」は、ともに日本国内産の木材や大理石などを用いて、豪華に製作された。単に図柄を描くだけではなく、空間を想像したうえで適切な材料を検討し、詳細に図面に文字を書き込んでいる点は、建築家による船室の図面の特徴といえるだろう。

村野藤吾は船室の設計について、次のように述べている。

「あるぜんちな丸」と「ぶらじる丸」は、ともに日本国内産の木材や大理石などを用いて、豪華に製作された。単に図柄を描くだけではなく、空間を想像したうえで適切な材料を検討し、詳細に図面に文字を書き込んでいる点は、建築家による船室の図面の特徴といえるだろう。

は、當時非常に珍しいことであった。

「橋丸」には外形・内装とともに、当時の飛行船や自動車でブームとなっていた「流線形」が採用されている。外形の流線形は構造上の問題等から限定されたが、談話室（展望室）の写真からはその形を見ることができる（図3）。椅子も同様に丸みを帯びたデザインで、本野精吾によるアール・デコ調のモダンデザインが、客船にも実現されていたことがわかる。

これらの客船のほとんどは現存せず、カラー写真も残されていない。そうした中で船室デザインを振り返る際、カラースキーム（着彩透視図）は貴重な資料となる。カラースキームは、内装を担当する建築家や装飾会社などが、発注元である海運会社への提案のために描いた完成予想図を指す。例えば村野藤吾が設計した「あるぜんちな丸」の一等食堂を描いたカラースキーム（図4）では、表面が塗りで仕上げられた天井のランプシェードの光沢とさらめきを、銀色のスパッタリングで表現している。建築家の手元に残されたカラースキームは、必ずしも実現した案とは限らないが、装飾や配色の検討過程を示すものとして価値がある。

村野藤吾、本野精吾の資料に加えて、もう一名、本学の卒業生に

ます。

——「対談・建築美をさぐる8章」『国際建築』第22巻第4号（美術出版社、1955年4月）より

また、図面資料とともに美術工芸資料館に預託された図書資料の中に、フランスの豪華客船「ノルマンディー」の雑誌特集号（*L'Illustration*, 1935）が含まれている。背に自身のイニシャルを箔押しして製本され、見開きにはサインもされていることから、客船や船室デザインの参考文献として愛読していたことがうかがえる。村野藤吾にとって船室デザインは、彼の戦前の設計活動の中でも精力を傾けた創作活動のひとつといえよう。

村野藤吾がこれら二つの外國航路の船室デザインに携わる少し前、本学にゆかりのある人物が、戦前・戦後をとおして人気を博したある船をデザインしていた。その人物とは、本学の前身のひとつである京都高等工芸学校図案科教授をつとめ、本学3号館の設計者でもある建築家・本野精吾（1882-1944）、その船は「橋丸」（1935年竣工）である。

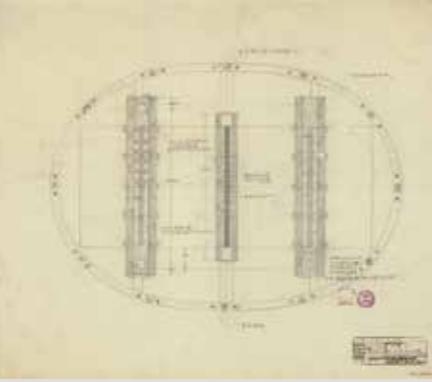


図2
村野藤吾「734（あるぜんちな丸）一等ローレンヂ
天井伏及象嵌模様透視図」
1939 AN.4950-34

図3
本野精吾「橋丸 談話室（展望室）」
1935 AN.5349-152

図4
村野藤吾「No.734（あるぜんちな丸）一等食堂（長崎）」
AN.5305-73

図5
吉武東里「60番館
一等喫煙室（内透視図）」
AN.3831-01